令和７年度　第３期
未修者小論文試験問題

受験上の注意事項

1　監督者の指示がある前に、この問題を開くことを禁止します。

2　試験開始の合図により、解答を始めてください。

3　試験開始の合図の後、印刷不鮮明等に気付いた場合は、黙って手を挙げ、監督者に申し出てください。

4　解答は、答案用紙に黒インクのペン又はボールペンにより書いてください。
消せるボールペンや時間の経過により字が消えるボールペンは使用しないでください。また、鉛筆は不可です。

5　試験時間は90分です。
試験開始後20分以内及び試験終了前５分間は、答案の提出及び試験室からの退出はできません。それ以外の時間に退出（途中退出）する場合には、黙って手を挙げ、自席で答案及び問題を監督者に渡してから退出してください。

6　この問題は、試験終了後、持ち帰ることができます。

7　次のもの以外は机上に置かないでください。
受験票、筆記具、時計（計算機能等のないものに限る。）、眼鏡。
受験票は、氏名、受験番号が記載されている面を表にして、監督者が見やすい位置に置いてください。なお、上記以外のものについては、監督者の許可を得てください。

8　問題検討のためのラインマーカー及び色鉛筆の使用は、問題用紙に限り認めます。

9　携帯電話等は、必ず電源を切って鞄等にしまってください。

10　試験室内では、耳栓の使用はできません。

11　試験時間中の発病等やむを得ない場合には、黙って手を挙げ、監督者の指示に従ってください。

12　試験時間中の喫煙や飲食（ガム等を含む。）は、禁止します。

13　試験終了の合図とともに、直ちに筆記具を置き、監督者の指示を待ってください。

14　不正の手段によって試験を受け、又は受けようとした者に対しては、試験を停止し、合格の決定を取り消すことがあります。

〔問　　題〕

「同一である」ことの意味に関する次の文章を読んで、後記［設問１］及び［設問２］に答えなさい（なお、本文の一部及び注を省略した。）。

６　数え上げとパラドクス――フレーゲとギーチ

ロック的な相対主義、とりわけその発展的な主張であるギーチ的な相対主義は、どのような背景や利点、射程を持つ理論なのだろうか。本節では、それらについて簡潔に素描しておくことにしたい。

前節で私は、相対主義の源泉がロック（またはホッブズ）にあると述べた。こうした理解は、真理の一端を捉えている一方で、ギーチ的な相対主義が生み出される実際の背景を忠実に描写するものではない。そのことはギーチの次のような不満から読み取ることができる。

> フレーゲは、「x は一つである」が「x は一つの F または単一の F である」ことを述べる不完全な言い回しであること（…）を強調した。一の概念と同一性の概念の間の関係は、英語での“one and the same”と同じく、ドイツ語でも“ein und dasselbe”として表現されるのだから、フレーゲが（…）相対化された同一性のテーゼを同じように主張しなかったことは、私にとってずっと驚くべきことであった。（Geach 1967, p.238）

よく知られているように、フレーゲは「「一である（Ein）」だけでは述語になりえない」と主張した。たとえば、「ティブルスは一である」や「花子は一である」という（助数詞もない）文だけでは、何を意味しているのか不明瞭である。この不明瞭さを取り除くには、「ティブルスは一匹の猫である」や「花子は一人の人である」といった次第に、「そのもとに属するものを確定的に境界付けするような」概念として事実上の種別概念を補ってやる必要がある。上記の引用文の前半でギーチが指摘するように、フレーゲにとって「一である」という述語は、「不完全な言い回し」で、それ単独では「述語になりえない」ものだったのである。

しかし、フレーゲはその考えを同一性（Gleichheit）にまで拡張しようとはしなかった。「同一性は、極めて確定的に与えられている関係であるから、それについては多様な種類のものがどのようにして現れうるのか推察できない」というのが、その主たる理由である。私が見る限り、同一性に対するフレーゲの態度の背景には次のような考えが少なからず影響しているように思われる。

同一性関係が見出されるのは数（Zahlen）の間だけではない。このことから帰結するように思われるのは、同一性は数のケースだけのために説明されるものであってはならないということである。前もって同一性概念を確立し、そこから基数（Anzahl）の概念と一緒になることではじめて、基数の同一性がいつ成立するかが明らかにならねばならないのだと考えるべきだろう。その際、数の同一性の特別な定義が必要とされることはない。（Frege 1884, s.74, 邦訳122頁）

フレーゲによれば、同一性は、数に限らずあらゆる事物に適用可能な普遍的な概念であり、「同一である」や「同じである」という述語は、事物に適用される以前から意味が確定し固定されている。このため、同一性は種別概念の助けを借りずともそれ自体で確定的に与えられていると考える必要がある。基数の間の同一性は、同じ基数であることに関する特殊な定義を追加的に要請するものではないとフレーゲは考えた。

これに対し、上記の引用文の後半でギーチが批判しているのは、フレーゲによる「一である」と「同一である」という二つの述語の分離である。英語やドイツ語のみならず、日本語においても「同一である」という述語は、「一である」という述語と本来不可分の関係にあるはずである。だとすると、「同一である」という述語もまた、「一である」という述語と同様に、種別概念がなくては成立しないという意味で不完全な言い回しと考えるべきではないのか。こうした提案を行うとき、もちろんギーチは、数と同一性をあらゆる面で完全にパラレルに扱うことができるわけではないことを自覚していた。フレーゲも指摘する通り、数と同一性の最も顕著な違いは、同一性は「事物がそれ自身との間で持つような関係」すなわち「対象（Gegenständen）の間の関係」である一方で、数は概念（Begriff）に対して与えられ、「数を述定することはある概念についての言明を含む」とりわけ、「対象が数の本来の担い手ではない」と考えられた主な理由は、たとえばトランプ一式を目の前にするときに、五二と一という二つの数が一つの対象に与えられるのではなく、「（トランプの）カード」と「（トランプの）束」という二つの（種別）概念に二つの数が与えられるからである。ここから、同一性と（基）数が、対象と概念という異なる階の項をとるまったく別の概念（または関係）であることが導かれる。すると、フレーゲによる「同一である」と「一である」の分離は、ダブルスタンダードでも何でもないように見える。

しかし、こうした種類の批判、すなわち「フレーゲにとって、数一（one）の付与は二階である一方で、「同じ」は一階の関係を表すことをギーチはまさか理解していないのか」という批判をギーチは一蹴する。「一である」と「同一である」の間の些細な違いは、両者とも種別概念（または名辞）の助けなしにはうまく成立しないということを退けるうえで決して十分で

はない。数の付与を支えるものが一項述語で表現される概念であろうと二項述語で表現される関係であろうと、それらが常に連動するような間柄にあり、かついずれの場合でも数の付与の際に種別概念が要請されると考えられる限り、フレーゲとギーチの主張の間に本質的な違いはない。フレーゲにとって数の付与は「一項述語で表現される概念と不可分である」一方で、ギーチにとってそれは「二項述語で表現される同値関係と不可分」で、そうした同値関係は個々の概念のみならず同一性関係とも密接に連動している。つまり、一階と二階の区別を理由として、「同一である」と「一である」という述語の「不完全さ」に対して異なる態度をとるのは、哲学的誤謬であるばかりでなく、数の種別概念への相対化に焦点を当てたフレーゲ哲学の正当な継承としても誤りである。

ギーチに従えば、種別概念の助けを必要とする点で「一」を「不完全な言い回し」とするのであれば、同じく数の付与を支えると考えられる「同一である」や「同じ」もまた「不完全な言い回し」でなくてはならない。トランプの例で言えば、異なる数字とスートの組み合わせなどから成る**五二枚の異なるカード**は、特定のケースに収められた**一つの同じトランプの束**でもあるために、どちらの意味で「同一性」を用いるかによって「同じ」の内実が変動するということである。これを一般化すれば次のようになる。すなわち、目の前のものを一つ、二つ……とものを数え上げる際に種別概念に関する情報が必要となるということと、目の前のものが同一か同一でないかを決定する際にカードまたはトランプの束などの種別概念が必要となるということは正確に対応している。ギーチにとって、「事物が数えられうるのは、それが事物についてのある種（kind）に属しているものとしてのみ」であり、「何らかの種に属する事物を数え上げることなくして、数え上げることについて語ることは意味をなさない」。ギーチ的な相対主義は、数と同一性をどちらも種別概念に相対化させることで、我々の日常的な**数え上げ**（*counting*）のあり方が同一性のあり方と連動していることを主張できるというわけである。

ギーチのフレーゲ批判は、ギーチ的な相対主義の背景を明らかにするとともに、その理論の利点も同時に示してくれるように思われる。ギーチ自身が述べているように、ギーチ的な相対主義は、数え上げと同一性の緊密な結び付きを利用することで、いわゆる**多者の問題**（*problem of the many*）を比較的容易に解決することができる。いま、マットの上にいる猫のティブルスは、b_1からb_{1000}までの千本の毛を持っていると仮定しよう。このとき、「ティブルスからb_1のみを除いたすべての部分」をc_1、「ティブルスからb_2のみを除いたすべての部分」をc_2という仕方で、c_1からc_{1000}までの存在者を定義することができる。ティブルスと重なり合い猫に特有の器官などを共有するこれら存在者は、みな猫でありながらも、毛の部分を異にするために明らかに同一ではない（ギーチはこれらを一つの身体と二つの頭部を持った猫になぞらえる）。すると、いまマットの上にいるのは、ティブルスとc_1からc_{1000}に至るまでの千一匹のお

びただしい数の猫という信じがたい帰結が導かれてしまう。**千一匹の猫のパラドクス**と呼ばれるこの問題を回避する方法は、ギーチによると簡単である――相対的同一性とそれに対応した数え上げを認めるだけでよい。(R)〔出題者注：種別的同一性に関するロック主義のこと。〕で認められる通りティブルスは、c_1からc_{1000}と同じ生物学的生命を持つがゆえに同じ猫である一方で、異なる毛を持つがゆえに異なる動物組織の塊（または部分の集まり）である。これと連動して導かれるのは、マットの上にいるのは千一個の動物組織の塊とも数え上げられる一つの猫だということである。そこでは「千一匹の猫」という信じがたい帰結はもはや生じない。

いまの問題がパラドクスに見えた原因は、「マットの上にいる個体は一つか、それとも千一なのか」もしくは「ティブルスはc_1からc_{1000}と同一なのか、あるいは同一ではないのか」という問題設定そのものにある。これらの問いは、種別概念の情報を欠く場合には答えようもないものである。正しく問うべきは、「ティブルスは、c_1からc_{1000}と同じ猫または同じ動物組織の塊なのか」であり、「マットの上にいる個体は一つの猫または動物組織の塊か、それとも千一の猫か動物組織の塊なのか」である。修正された問いは、猫概念と動物組織の塊それぞれが与える種別的同一性規準を参照することで応答可能となる。このようにギーチ的な相対主義は、多者が一匹の猫であることを受け入れることで、「ティブルスはc_1からc_{1000}のいずれの猫とも同一であるように見えるが、いずれとも同一でないように見える」という素朴な日常的判断をうまく捉えることができる。

類似した解決策は、かつてマイケル・レイによって**物質的構成の問題**（*problem of material constitution*）の一種として分類された**ティブルスのパラドクス**――このパラドクスの分析哲学上の起源はウィギンズであるが、ウィギンズ自身は「ギーチによって編み出されたパズル」と明言している――でも用いることができるだろう。いま、ティブルスから尾だけを取り除いたすべての部分を「ティブ」と呼ぶことにすると、ティブは、ティブルスと同じく猫でありながらも、尾の有無において異なるためにティブルスとは同一ではない。しかし、ティブルスがある日、不慮の事故で立派な尾を失ってしまったとしよう。この時点以降、ティブルスとティブは、完全に重なり合うために明らかに同一である。しかし、事故を経てもティブルスとティブがどちらも通時的に同一のままだとすると、同一性の推移性により明らかな矛盾が生じる。尾を失う前の時点t_1におけるティブルスが事故後の時点t_2におけるティブルスと通時的に同一であり、かつt_1におけるティブがt_2におけるティブと通時的に同一であり、かつt_2におけるティブがt_2におけるティブルスと共時的に同一であるにもかかわらず、t_1におけるティブはt_1におけるティブルスと明らかに同一でないからである。しかし、ギーチ的な相対主義によれば、同一性は種別概念に相対化されねばならず、t_1におけるティブはたしかにt_1におけるティブルスと同じ動物組織の塊ではないという意味では同一ではないが、同じ猫であるという

意味では同一である。動物組織の塊という観点から見ると、ティブルスは尾を失う時点で同じ動物組織の塊ではなくなるものの、猫という観点から見ると、彼はティブと同じく尾を失うかどうかにかかわらず終始同じ猫のままである。ここにいかなる矛盾も存在しないのは、同じ猫であることと同じ動物組織ではないことは両立するために、単に「同一である」と語ることがすでに誤解の源泉だからである。よって、ティブルスのパラドクスから矛盾を取り除くことを可能にするという点は、相対主義の利点に挙げられる。

では、その他のパラドクスに対しては、相対主義はどのように応答できるだろうか。同一性をめぐる厄介な問題としてしばしば取り上げられるのは、**分裂の問題**（*fission problem*）としての**テセウスの船のパラドクス**である。いくつもの木の板から成る一隻の船を想像し、それをs_1と名付けたとしよう。この船の板を一つずつ別の鉄板に取り換えていくと、最終的には元のs_1にそっくりだが鉄板だけから成る船が誕生する。この船をs_2とする。他方で、s_1から取り外された元の木の板を使って別の場所で再び船を組み立てたとすると、最終的に元のs_1にそっくりな木の板だけから成る船が誕生する。この船をs_3と呼ぶことにすると、その結果生じる問題は明白である。すなわち、s_1はs_2とs_3のどちらと同一なのだろうか。両者の船と同一であることは不可能である。なぜならば、s_2とs_3は明らかに同一ではなく、同一性関係は推移的だからである。つまり、途中で消失したのでなければ、s_1はどちらか一方のみと同一でなければならない。

ギーチ的な相対主義の見地に立つと、この問題に対しては次のように応答可能かもしれない。元の船s_1はs_2と同じ船である一方で同じ木の板の集まりではないが、s_1はs_3と同じ船ではない代わりに同じ木の板の集まりである。これによれば、テセウスの船のパラドクスがパラドクスに見えるのは、先の千一匹の猫のパラドクスと同様に、「s_1はs_2とs_3のどちらと同一なのか」と問う最初の問題設定にある。そこで問題となる「同一性」が同じ船であることを表すのか、同じ木の板の集まりを表すかを明確にしない限り、この問いは答えようがない。逆に言えば、船と木の板の集まりという二つの種別概念の違いをはっきりとさせれば、s_1はs_2と同じ船であるがs_3とは同じ船ではない（が同じ木の板の集まりである）と簡単に答えることができる。

しかし、この相対主義的な応答が本当に問題の解決になっているかについては慎重に考慮する必要がある。というのも、s_1から木の板を一枚取り外していく際に、鉄板で取り換えることなく、別の場所で再びその木の板を使ってs_1にそっくりの船s_4を作る場合には、s_4はs_1と同じ船であるように見えるからである。組み立て式のベッドは、別の場所で新しく組み立て直したとしても組み立て直す前と同じベッドである。これと類比的に、s_1は新しく組み立て直された木造船s_4と同じ船だと考えるのが妥当だろう。そうすると、なぜs_1が鉄板から成るs_2とだけ同じ船で、元の素材を共有するs_3とは同じ船ではないと言えるのかが不明瞭に思われる。テセウス

の船のパラドクスにおいて重要となるのは、s_2とs_3が元の船s_1との対置において同等な立場にあり、どちらか一方だけがs_1との同一性に際して優位となることはないという点である。それは、同じ船であるという種別的同一性についても変わらないだろう。つまり、上記の応答では依然として次のような懸念は残る。すなわち、s_1はs_2とs_3のどちらと**同じ船**なのだろうか。この場合、ギーチ的な相対主義はパラドクスの芽を摘むことができていない。

（横路佳幸『同一性と個体―種別概念に基づく統一理論に向けて』116頁～123頁（慶應義塾大学出版会、2021））

［設問１］（100点）

著者のいう「ギーチ的な相対主義」を400字以内で要約しなさい。

［設問２］（200点）

本文に出てくるテセウスの船s_1について、船の板を一つずつ別の鉄板に取り換えた船s_2と、元の木の板を使って別の場所で再び組み立てられた船s_3の、どちらが船s_1と同じ船であると考えるか、自身の見解を600字以内で述べなさい。